

# TRIAL &

JVC 日本国際ボランティアセンター会報誌 トライアル・アンド・エラー (試行錯誤)

# ERROR



【特集】東エルサレム。非暴力の解放運動

「聖地」と呼ばれる街の  
「差別と暴力」に向き合う

【報告】南スーダン緊急支援

関心が向けられない  
国内避難民を支援する

【呼びかけ】財政構造と支援者分析を元に

JVCが自由な活動を  
維持するための  
財政基盤づくりを

ヒズマ第二女子校の学校保健委員会の生徒たちが学校で緑化活動を行う様子。写真は古タイヤを植木鉢代わりにしてミントを植えている。日本の学校ではクラブや委員会活動に生徒たちが参加するのは普通だが、パレスチナではそうした習慣がない。保健委員会の生徒たちは、そうした活動を学校で根付かせるために働く。







### パレスチナ・東エルサレム事業概要

【事業名】エルサレム県における青少年のレジリエンスと地域保健の向上事業  
 【事業目的】学校保健委員会の自発的活動を動力源に、教師や教育省、住民と共に地域の保健問題の解決を探り実施する仕組みを創る。また能力向上により若者の尊厳を取り戻し、占領への抵抗・回復力(レジリエンス)を高める。  
 【事業該当場所】パレスチナ・エルサレム県に位置する12コミュニティおよび16校  
 【事業対象者／対象者数】学校保健委員240人、学校生徒1,600人、学校教師32人、政府職員10人、保健委員会を支える地域保健サポートチーム80人、地域住民3,680人(計:5,642人)  
 【カウンターパート】パレスチナ医療救済協会 (Palestinian Medical Relief Society)  
 【事業内容】健康保健トレーニングを受けた生徒が、教師や教育省職員のサポートを受け、地域保健サポートチームと共に地域住民の健康・福利を改善するプロジェクトを1つ企画・実施する。また他地域と経験を共有し、学び合う。

さの観点からも、エルサレムを首都として扱うのはセンシティブ過ぎるからだ。こうした背景から、トランプ氏の発言を国連のパレスチナ大使は痛烈に批判している(注3)。

### 圧倒的な差別と暴力

東エルサレムに暮らすパレスチナ人は長年苦しい生活を強いられてきた。例えば、イスラエル当局によるパレスチナ人の家屋破壊は有名で、67年の完全占領後に家屋の増改築がイスラエルの建築法に則っていないければ、基本的にパレスチナ人の家屋は破壊の対象となる。

加えて安全対策や都市計画、イスラエル人への暴力行為への見せしめと称し、今まで多くの民家やパレスチナ人の施設が破壊されてきた。その数、16年だけでも153軒に及び、このために移住を余儀なくされた人は同年だけで227人になる(注4)。

また、東エルサレムにおける公的サービスは、所得税や消費税など

はイスラエル人市民と同等に徴収されるのに、東エルサレムのパレスチナコミュニティの開発・発展に用いられる公共費用は、イスラエル人コミュニティの10%に留まる。エルサレムにおけるパレスチナ人の人口割合が全体の3分の1以上(注5)であることを考えれば、どれほど不平等な政策なのか分かる。

教育面でも、東エルサレムでは学校の数は圧倒的に足りず、人権NGOの調べでは15年には少なくとも1000個の新しい教室が必要といわれていた。実際、公立学校に通える子どもはわずか4割で、高校ともなるとその数はさらに下がるとされている(注6)。この状況に、パレスチナ人は違法を承知で既存の学校を増築することでその場をしのいでいる。ただし、当局に見つかればただちに教室は閉鎖され、下手をすれば関係者が逮捕されることもある。

構造的な差別・暴力が横行するなか、パレスチナ人が日々対面しなければならぬイスラエル人と、それを警護するイスラエル兵・警察からの直接的な暴力も忘れてはいけな

◎注3…<http://ngo-jvc.info/2hXQaPF> Ma'an News 11月13日「Palestinian UN envoy threatens US if Trump moves embassy to Jerusalem」◎注4…<http://ngo-jvc.info/2hXNvpv> OCHA oPt "Monthly Figures" ◎注5…B'ETSELEM <http://ngo-jvc.info/2hXKLLv> ◎注6…Association for Civil Rights in Israel. May 2015 "East Jerusalem 2015: Facts and Figures"



エルサレム県で行われる家屋破壊の様子。2013年撮影。家屋破壊はブルトーザーなどで行われるが、破壊前に退去しない場合は、文字通り一切合財が破壊され、人々は移り住む場所も無く途方に暮れる。

い。パレスチナ人の若者は街を歩いているだけで兵士に度々尋問され、バスに乗っているだけで怒鳴られ、小突かれたりする。こうした暴力に少しでも抵抗すれば裁判なしに投獄され、下手をするとその場で銃殺されることもある。

**非暴力で占領に立ち向かう  
力強さを身につけるために**

東エルサレムに住むパレスチナの子どもたちは、日々の生活のなかで、圧倒的な不正義、差別、暴力を目の当たりにしながら、やり場のない怒

りや憂い、恐怖を抱えて育つ。多感な時期にこうした状況を乗り切れず、結果的に希望を失い、自暴自棄に陥る子どもも後を絶たない。占領問題を抜きに、パレスチナの子どもの生活は語れないのだ。

事実、15年10月頃から、エルサレムの若者や子どもが単独でイスラエル市民やイスラエル兵を襲う事件が相次いでいる。希望を失った若者たちが「一矢報いたい」との一心からか、命をかけてイスラエル人を襲う。その多くはカッターなど小さい刃物で行われるが、フル装備のイス

ラエル兵にその場であっけなく射殺されたり、返り討ちに遭い瀕死の状態に撃たれた血まみれの子どもが、やじ馬で集まったイスラエルのユダヤ人たちに罵倒される映像が一時期インターネットで出回り、国際社会から痛烈に非難されたこともある。

こうした若者からの無差別攻撃を理由とし、イスラエル当局はイスラエル市民には銃の携帯を許可している。自衛のためなら、イスラエル市民も超法規的に相手を殺害できることが暗黙に認められ、これが状況のさらなる悪化を招く。極めてアンバランスな力関係のなかで、勝機の無い相手に刃向うパレスチナ人の若者や子どもの様子は、はたから見ると形を変えた自殺のようにすら思えてくる。

JVCパレスチナ事業では、こうしたエルサレムの若者の状況を危惧し、11年頃から当地で学校保健事業を行っている。エルサレム市からも、西岸にあるパレスチナ政府からも支援を受けられない東エルサレムは、国際NGOからの支援先として

も見過ごされがちな場所である。

JVCは現地パートナーNGO「パレスチナ医療救済協会」と協働し学校に保健委員会を設立、学生たち自らが日々の健康や生活を守るように、栄養や衛生の知識は勿論、救急救命法など、暴力以外で占領に立ち向かう力強さを身につけてもらうことを目的としたトレーニング活動を実施してきた。

また、15年12月からはそれに加え、しなやかに生きる力、いわゆる「レジリエンス」の向上や、地域の福祉向上を目指したトレーニングも重点的に実施し、昨今のエルサレムで頻発する若者の殺傷行為を少しでも減らせるように奮闘している。

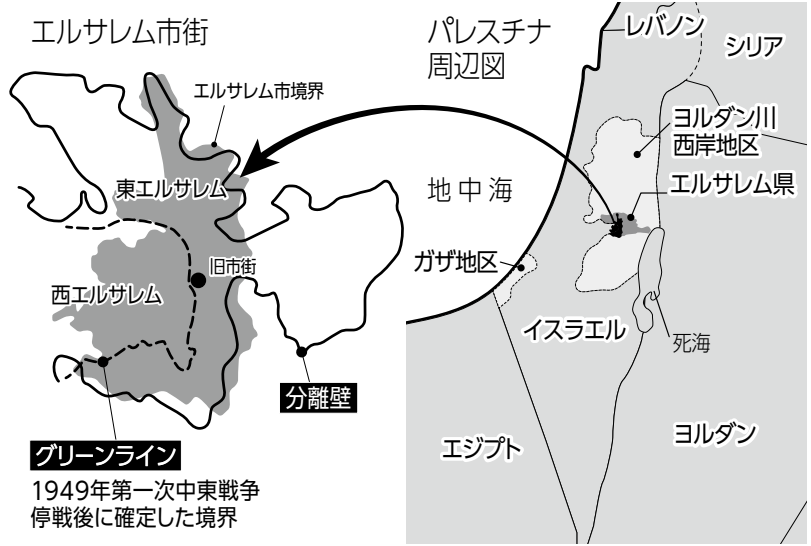
こうした事業の変化は、「エルサレムの若者たちに、逆境に負けない精神的な基盤をもってほしい」というパレスチナ医療救済協会のスタッフの意志の表れでもある。

事業のなかでは、スキルを得た学生たちが地域に赴き、地元の若者や大人と協働で小規模プロジェクトを形成・運営・実施する。プロジェクトを通じて地域福祉を向上させながら



# 東エルサレムの特異性

エルサレム市はイスラエル・パレスチナ両政府が首都と主張している街で、パレスチナ領であるヨルダン川西岸地区に隣接している。市の西側はユダヤ人、東側はパレスチナ人の居住区だが、1967年にイスラエルが強制的に東西エルサレムを併合した後も、両国の市民が近接して居住するために問題が尽きない。東エルサレムはイスラエル政府が実効支配するため、意図的にその公共サービスを制限しているし、NGOの活動も制限している。さらに、イスラエルが作った巨大な分離壁がヨルダン川西岸地区と東エルサレムを分断しているため、パレスチナ政府からの支援も届かない。結果、東エルサレムのパレスチナ人はどこからの支援も届きにくい状況に置かれている。



**グリーンライン**  
1949年第一次中東戦争停戦後に確定した境界

「存在することは抵抗すること」(注7)という言葉に象徴されるように、あらゆる人々の生活そのものが、こ

らも、若者の自尊心を守り育て、共感し合える仲間としての信頼関係を築き上げる活動である。12の地域に位置する16の学校でプロジェクトを実施しているが、その多くが、実際に地域の福祉に貢献する「地域の清掃」であったり、地域で起こり得る災害に対応する「緊急チーム立ち上げ」であったりする。

## 自尊心を 取り戻す若者たち

近年、レジリエンスという言葉は国連や日本でも多用され、「逆境力」や「忍耐力」、「苦難に直面してもそのまま折れてしまわずにしなやかに元に戻る力」という意味をもつ。パレスチナでは「スムード(不変の堅牢性)」と訳されることが多く、レジリエンスよりずっと前から人々の間で親しまれてきた。そして、今ではパレスチナにおける非暴力の解放運動を象徴する言葉となっ

ている。

「存在することは抵抗すること」(注7)という言葉に象徴されるように、あらゆる人々の生活そのものが、このスムードにつながっている。こうした背景にあって、パレスチナ医療救済協会エルサレム支部のスタッフたちが、「レジリエンス向上」を一つの事業の目標に設定したことは、字面以上に意味深い。

以下の言葉を聞いてほしい。

「自分に自信がもてると、責任感も増してくる。自分がそうだった」(フハイム君)。

「人を助けていると、自分に自信がもてるようになる」(ムハンマド君)。

「友だちの今の気持ちを聞いてから、アドバイスするんだ。自分が変わるためには、自分で何かするしかない。だから、自信がない友だちにもそう言っているよ」(アブデルマリク君)。

これらは、事業の対象校の一つ、東エルサレム・アイザリアのマスカット男子校の生徒(14歳)に「どういうときに責任を感じる?」、「自信のない他の生徒に、どうやって自信をもってもらえばいい?」と質問したときの返答



ヒズマの学校保健委員会と地域の若者による小規模プロジェクトの様子。村にゴミ箱を設置し、今後は清掃キャンペーン実施も考えている。生徒と地域のメンバーが話し合って決め、村の評議会にも好評である。

だ。

エルサレムの状況は、政治的な大局が動かない限り簡単には改善しない。そうしたなか、NGOとしてできることはあまりに地道で目に見えにくい。だが、事業を通じて出会った若者たちのこうした言葉から、若者たちの間で力強く生きるための基盤が確実にできつつあると感じる。

「生きることは抵抗すること」。

まさにそれを体現するために、今後も東エルサレム事業は継続的に実施していきたい。



パレスチナ事業現地調整員 並木 麻衣

## 東エルサレムに生きる人たちの姿

東エルサレムの現状をより具体的に理解してもらうため、現地に生きる二人の住民のエピソードを紹介したい。直面せざるを得ない就職難やイスラエルからの暴力。だが、その状況から逃げずに立ち向かう姿が伝われば幸いである。

ムハンナドさん（仮名）(28)

「ここには思い出が詰まってるんだ。良い日々だったよ。」

そう言ってパレスチナ人のムハンナドさんが私を案内してくれたのは「マミラ・モール」。イスラエルのショッピング・モールだが、パレスチナの土地を奪ってエルサレムに建てられた「入植地」だ。

「ここ、入植地よ。私は買い物したこともない」と

と言つと、彼は笑って答えた。「僕はここで働いていた。だって、他に方法が無かったんだから」

彼が十代の頃、ここでの仕事は掃

除夫だった。同僚は、他に条件のいい仕事を見つけていることができないパレスチナ人ばかりで、会計士や教師の有資格者もいたという。

そういう人たちの触れ合いが楽しく、2年間その仕事を続けた。15時から23時半までのシフト後、モールの隅に隠れて酒を飲んだ。

夜はエルサレムのイスラエル側の目抜き通りを歩いては、イスラエル人に喧嘩を吹っかけていた。それを止めてくれたのは、周囲にいたパレスチナ人の大人たちだった。

「まあまあ、落ち着いて座って、コーヒーでも飲んで、となだめられていたよ。その30代や40代の彼らの話を

聞くようになって視界が開けた。それで、勉強しようと決めた」

その後、専門学校に通いマッサージ師になった。

エルサレムの若者について私が尋ねるとこんな言葉が返ってきた。

「エルサレムでは、教育を受けたって良い仕事に就くのは難しい。パレスチナ側には仕事がないし、イスラエル側で通用する資格は弁護士と医者くらい。だからこの若者は、学校からドロップアウトしては、イスラエル側にある酒やドラッグや女などの誘惑に乗ってしまう」

東エルサレムの若者は、彼のように落第を免れる人ばかりではないことを、ここで暮らす私は知っている。通りを夜な夜な集団でうろつき、乱暴に車をドリフトしてストレス発散する若者に「彼らは希望もてない」と大人は嘆息するが、この難しい環境でどうすれば希望をもてるのか。

そんな、私自身が悩んでいた問いをぶつけると、「諦めないで挑戦し続けるしか無い。少しずつ。でも確実に結果を出す。僕はそうしてきたから」と真剣な顔で彼は言う。

「君がNGOで働いているなら、東エルサレムで活動してほしい。西岸はたくさん支援が届くのに、ここには来ない。ただしお金を与えるのではなく、教育や仕事、挑戦の機会を創ってくれないか。僕らは働きたい。自分の力を使いたい。日本人たちがそれに寄り添ってくれることも、僕らには希望なんだよ」

親戚は皆、より良い生活を求めアメリカへと出て行ってしまった。だが、今は弁護士を目指し再び勉強の道志す彼自身は、いつか弁護士資格を取った後もエルサレムに残り続けるつもりだ。過去の自分のように、何かを必要とする人々のために。

サマー・ハ・シユニーさん (28)

シユアファート難民キャンプ出身のサマー・ハさんは、JVCのパートナー団体「パレスチナ医療救援協会 (Palestinian Medical Relief Society 以下PMRS)」に所属する保健指導員だ。大学を卒業した2012年から、病院でのインターンやボランティアの経験を積み、PMRSの学

# 日本とイスラエルの 武器の共同開発について

JVC パレスチナ事業現地代表 金子 由佳

防衛省は2016年8月、「無人機の研究開発ビジョン」を発表した。同省のイニシアティブで14年に企業への武器開発説明会が実施されて以降、富士重工やNECをはじめ多くの企業がこの波に乗り、今や日本は国を挙げて武器開発に乗り出す動きを見せている。無人機の開発は、味方が死ぬことが無く、より効率的に「敵」を攻撃し、上空から情報を収集できる点で、防衛戦略の上で重要（注1）とされている。

安倍首相は14年6月から、無人機の代名詞、ドローンの開発・使用で有名なイスラエルのネタニヤフ首相と急接近し、両国の経済協力や防衛協力の重要性を確認する声明文を出している。くしくもそれは、ドローン攻撃で多数の死者を出した14年ガザ戦争の1ヵ月前頃のこと。同時期、日本では武器と関係ないレベルでのドローン関連記事が目につくようになり、ガザ戦争とは無関係に日本人にドローンの名前が定着していくことにガザに関わる者として強い違和感を覚えた。

ドローンは、アラビア語では「ザンナーナ」（羽音）と呼ばれ、14年のガザ戦争中、昼夜問わずガザ上空にあり、常に人々の恐怖とストレスを煽っていた。戦争から2年経った今も、時々偵察用ドローンがガザ上空を飛んでいる。人々はその音を聞かされた時に「ドローンは大嫌いだ」「当時フラッシュバックのように思い出されて怖い」と言う。

日本では市民団体「武器輸出反対ネットワーク（NAJAT）」などの動きで、日本とイスラエルとの無人機共同開発については一旦収束の動きを見せている。しかし、メイド・イン・ジャパンの武器が世界に広がる日が間違いなく近付いていることを私たちは忘れてはならない。

……彼の後を必死で  
追いかけたわ」  
イスラエル軍や警察と若者の衝突、負傷や死亡事件が絶えない東エルサレムで、「ユダヤ人を殺してやりたい」と口にする血気盛んな若者に私は何度も出会った。同

東エルサレムを中心に暴力が吹き荒れるなか、この明かりが消えないよう、どう寄り添うか……。外部からの支援者である私たちに提示された問いの一つである。

校保健事業に従事している。普段の彼女は、柔らかく可愛らしい雰囲気をもった線の細い女性だ。少し控えめで、礼儀正しい。



パレスチナ医療救援協会保健師のサマーハさん

その空気は、教壇に立った瞬間に一変する。凜とした表情で生徒に問いかけながら、保健や栄養について理路整然と話すのだ。

誠実さがにじみ出たその立ち振る舞いに、どの教師も「サマーハは私たちの娘よ！」「僕たちの大切な友だちだ」と評価し、どの生徒にも「分かりやすい」と言わしめる講義スタイルはP.M.R.Sでも評価が高い。

その知識を得た場所は、パレスチナ自治区内で最高峰のビルゼイト大学。その学業での成功には大きな理由がある。10歳の頃に兄を亡くしたのだ。00年12月8日、第二次インティファダの最中だった。

「断食月に東エルサレムのアルアクサー・モスクへお祈りに行って、そのまま帰ってこなかったの。その日はイスラエル軍がお祈りを許してくれなくて、反対デモの最中にイスラエル兵に撃たれて……。救急車が来たときにはすでに亡くなってしまったよ。私たちが知らないうちに。兄は16歳。高校生だったわ」

その後、小学生だった彼女は何を  
感じ、考え、どう動いたのか。

「何かしなきゃいけない。そう思っ  
て、ひたすら勉強に打ち込んだわ。  
それまでも、私の成績はクラスで一番  
だったの。兄の死後は学校で一番  
になった。兄は礼儀正しくて、教員

じようには思わないのと尋ねると、  
真っ直ぐな答えが返ってきた――  
「知識こそが武器なの。占領に立ち  
向かい終わらせるための、私たちの  
武器よ」

彼女の毎日は、まさにその意志を  
体現している。占領下で生きる人々  
の手に健康を取り戻すため、学校や  
地域を回っては慢性病や衛生、時には  
肥満についても講義し、人々への  
アドバイスを続け寄り添う。

「カウンセリングと一緒に成果を  
出せたときは、本人よりも喜んで  
うくらいよ。誰かの役に立ちたい  
の」

P.M.R.Sの事業を通じて多くの  
人々と関わり合い、地域ではちょっ  
とした有名人になった。彼女を中心  
にして広がる小さな支え合いの輪  
は、先の見えない占領下の暮らしの  
なかで、確かに輝く灯火の一つであ  
るように見える。



読者のみなさんからの 質問募集中!! 会員担当:宮西まで  
お寄せください。



生き方を共にする仲間づくりがタイの活動の根本  
(2016年11月の研修時)

**Q** 東南アジアのタイは、  
もはや「中進国」と言えるほど  
経済発展していると思いますが、JVCも含む  
海外のNGOからの「援助」はいまも必要なのですか？

**A** 目に見える形での「援助」はたしかに減っています。  
しかし、新しい社会的課題の解決には、国境を越えた  
連携がこれからも必要だと考えます。

経済的に見ればDAC (OECD開発援助委員会) の援助受取国リストでも高中所得国に分類されるタイ。一人当たりGDPも5,878ドル (2015タイ国家経済社会開発委員会) と、JVCが活動する隣国カンボジアの約5倍、ラオスの約3.2倍を誇ります。

肌感覚では、2000年代に入ってから国際NGOをはじめとする海外援助団体の撤退が目立つようになりました。「タイは援助の卒業国」という言葉を聞くことも増えてきたように記憶しています。タイの市民社会も成熟を見せ、彼ら自身で国内の課題解決に臨むことができるほど、経験と自信を深めてきました。

JVCも東北タイのコンケン県で実施した「地場の市場づくり」プロジェクト (1999～2005) 以降は、「プロジェクト」という形態で活動を実施していません。現在は「交流」という形で、日本とタイの社会課題を学び合う活動を実施しています。具体的には、日・タイの若手農家同士が、自信と誇りをもって自立していく過程において、互いの経験を交換し合う「日・タイ若手農民交流」を実施したり、タイで原発建設計画が議論され始めた際には、タイのエネルギー政策に関わるNGOスタッフや原発建設候補地で環境保全活動をするNGOスタッフに対して、東日本大震災に伴う原発事故の経験と教訓を学ぶ機会を提供してきました。

一見すると、「援助」を経て「交流」に移行したように見えますが、そうではないと私は考えています。「交流なき援助はあり得ない」——これは「地場の市場づくり」プロジェクトを担当していた元JVCスタッフの松尾康

範さんの言葉です。JVCタイは、タイと日本の関係を、同じ時代に生きる者同士、地球的課題の解決にあたる「仲間」と捉えて、タイのNGOや農民と付き合いってきました。出会った相手の足りないところ (いわゆる援助のニーズ) を探すのではなく、私たち自身がこれからどう生きていったらよいかを語り合う中で、今私たちにできることを模索してきました。それがたまたま「プロジェクト」という形で表現できる時期があった、というのが正しいように思います。プロジェクトの陰に隠れて見えづらくなっていたかもしれませんが、これまで36年間、ずっとJVCタイの底流をなしているのは、「交流」という名の「学び合い」です。

いまとなっては経済発展を遂げてきた日本も、格差や貧困など新たな課題に直面しています。同様に、タイ社会もまた、これまでに経験してこなかった様々な社会課題を抱えています。そして、そのいずれもが「こうすれば解決できる」という処方箋が用意されているわけではありません。この会報誌のタイトル「Trial&Error」には、たゆまぬ試行錯誤の中でしか、地球規模の複雑化した問題に対する解決の糸口は見つけられない、というメッセージが込められているように思います。国を越えて互いの経験を交換し、勇気と刺激を与え合える人間関係こそが、「持続可能な社会」への風穴を開ける試行錯誤の基盤となるのです。「援助」とは、本来はそうした課題解決のひとつの表現方法でしかない、と考えています。

(タイ事業担当 下田 寛典)







グンボ地区の避難民キャンプ。母親たちは食べられそうな野草を採集して飢えをしのいでいた。子どもたちは種を食べている。

[報告] 南スーダン緊急支援

# 関心が向けられない 国内避難民を支援する

日本中が「駆け付け警護」の新任務を負った自衛隊の南スーダン派遣に関心を向けている。だが、南スーダンでは2013年から内戦が続き、今年7月の紛争でも、食べ物にも衣服にも住居にも手が届かない国内避難民が多数生まれた。人々の現状とJVCの支援にも目を向けていただきたい。



スーダン事業現地代表  
今井 高樹

んでいる。子どもは草についた種をちぎって食べていた。

ジュバ市のナイル川対岸のグンボ地区。避難民キャンプでは、7月の戦闘で郊外の自宅を追われた281世帯が生活していた。食料の配布は最初の1ヵ月だけ。当初は生活用品を支援する予定だったが、急ぎよ半月分の食料支援に切り替えた。

配布の当日、安堵の表情を浮かべる避難民から、「こんな声が聞こえた。「キャンプ暮らしは大変だけど、ジュバにいる私たちはまだマシだわ」  
どういうことか、一瞬、意味が飲み込めなかった。

「私の故郷では、子どもたちがニワトリのように首を切られ、殺されているの」

彼女の故郷は、ウガンダ国境に近い中央エクアトリア州の村。7月以降、州内に戦争が拡散し、軍や民兵集団による村々の焼き討ち、住民の殺りく、レイプが繰り返されたのだ。

郊外へ数キロ、ナイル河畔の教会では、ロボノク郡（ジュバの南80キロ）から逃れてきた4人の母親と子どもたちが敷地の片隅に身を寄せて

子どもたちがニワトリのように殺されている

昨年9月、緊急支援のため入った南スーダンの首都ジュバの状況は、予想を超えていた。

壁一面の弾痕や略奪された商店。そんな戦闘の痕跡が残る市内で、出会った人の誰もが私に何かを訴えて

きた。毎晩のように響き渡る銃声、いつ支払われるか分からない給与、年率800%のインフレで「手が届かない」食料品の価格…。

とりわけ厳しい状況にあるのが避難民キャンプの人々だった。

「配布された食料なんて、とっくにないわ。今日の食事はこれだけ」  
母親が、野草の葉をむしって煮込





新しい服を着た避難民のアドリアナさんと子どもたち。初めてみな笑顔を見せた。次の日曜には、この服を着て教会に出掛けた。

いた。

「ある日、知らない男たちが村にきて、突然、銃を撃ち始めました。目の前で子どもたちが倒れて…」

赤ん坊を抱えた母親が、惨劇の一部を話してくれた。死体は家に投げ込まれ、次々に火が放たれたという。畑仕事に出ていた夫たちの行方は分からない。

歩き続けてここにたどり着いてから1ヵ月、教会からの差し入れ以外には食料がない。蚊帳が足りず子どもはマラリアに罹患していた。身体を洗う石鹸もない。

すぐに支援を届けた。1ヵ月分の

食料のほか、蚊帳や石鹸、そして衣料品。服を手にとると、子どもたちは大急ぎで着替え始めた。

**知るべきことは  
「駆け付け警護」  
だけではない**

支援活動にひと区切りつけ10月に日本に戻ると、国会もマスコミも自衛隊「駆け付け警護」の話で持ち切りだった。

7月にジュバで起きたのは「戦闘」なのか「衝突」なのか。ジュバは「危険」なのか「安全」なのか。そんな議論が延々と繰り返されていた。

「現地は内戦で危険だとのニュースしか見ない。でも、そこで生活する人がいるはず。それが知りたい」

私の活動報告会の参加者の言葉だ。報告会では「現地の実情を初めて知った」という声が多く寄せられるなか、次のような感想もいただいた——「今日は、南スーダンの人たちの笑顔を見てよかった」

11月、支援を再開するため戻ったジュバは、少し様子が違っていった。「また戦闘が始まるのでは」と人々が怯えていたのだ。

2013年に始まった内戦は、大統領の出身民族ディンカと元副大統領の出身民族ヌエルという対立構図で説明されてきた。しかし今、その構図は変わりつつある。エクアトリア地域では、襲撃を受けたエクアトリア人の一部が武器をとってディンカに対抗し、ディンカの民間人をも襲撃している。国連の特別顧問が「ルワンダを思い起こさせる。民族大虐殺の恐れがある」と警告を発したように、報復の連鎖が始まっているのだ。

**生活再建のために  
支援を続け、  
この国の危機を伝えたい**

「民族対立なんて、戦争の『原因』ではなくて『結果』なんだよ」

ジュバに住むエクアトリア人の友人の言葉だ。

「ディンカとヌエルだって、隣人として千年も共存してきた。こんなに憎しみ合うようになったのは、今の戦争が起きたからじゃないのか」

だとすれば、どうやって、この憎しみの連鎖を止められるのか。「政府も反政府も、それ以外の武装

グループも非武装のグループも、全部が集まって『どうやって殺し合いを終わらせるか』を話し合うしかないだろう。国際社会には、それを仲介して欲しいんだ」

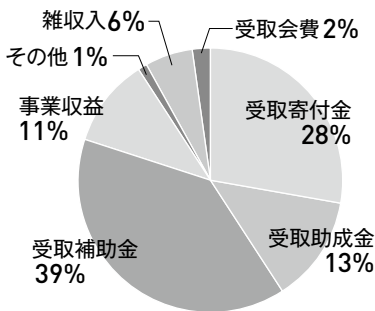
では国際社会の一員として、日本はどう関わるべきか。だがそんな議論もないまま、11月下旬には新任務を帯びた自衛隊がジュバに到着。

その頃、私たちは次の支援活動を始めていた。多くの避難民が生活するグンボ地区で診療所への医薬品支援。そして、襲撃され焼き尽くされたロボノク郡の村への食料支援。

ロボノクでは予想よりもずっと早く、人々は村に戻って犠牲者に祈りを捧げ、仮設の小屋を建てて生活を始めていた。食料の支援は、人々の生活再建を当面支えるものだ。外国人の入域は治安面から難しいため、現地のNGOに配布を託して、私はジュバを離れた。

深刻さを増すこの国の危機。世界そして日本に向けて、それをもっと伝えなくてはならない。次の渡航予定は3月。できる限りの支援を継続し、現地からの声を発信し続けたい。

図1 2015年度 JVC経常収益内訳



[呼びかけ] 財政構造と支援者分析を元に

# JVCが自由な活動を維持するための財政基盤づくりを

例えば、他のNGOと違ってJVCが南スーダンで活動できるのは、その活動原資が自己資金であるからだ。政府からの補助金は時として、その外交事情に左右され、その国でのNGO活動に制限をかける場合もある。支援されるべき人たちに支援を届ける。そのためには、自己資金の拡大は不可欠だ。JVCの今後の施策を提示したい。



サポーターリレーションズ担当  
野辺地 和郎

## 課題は寄付金を増やすこと

年次報告にてお伝えしていますが、2015年度JVCの収入にあたる経常収益は約3億6千万円。うち会費が全体の2%、寄付金が28%、外務省などからの補助金が39%を占めています。寄付金の約3分の2は

個人からで、残りは企業等の団体からです。すなわちいわゆる一般市民からの会費と寄付金は全体の約2割にすぎません(図1参照)。

JVCが今後も自由な活動ができる、社会に対してあるいは政府に対しても自由な意見が言える団体であり続けるには、支援者の数を増やし財政基盤を安定化させる必要があります。また、一般市民の方からの尊い寄付額を増やし、政府関係からの補助金比率を下げるのが重要です。

いかにして一般の方からの寄付金を増やすか。そのためには現在の寄付者の姿、思い、不満、希望などを知ることが必要です。16年春に寄付者対象にアンケート調査を実施したところ900通超の回答を得、同時に一部の方の対面インタビューも行いました。

その結果の一部を紹介します。

JVCを知ったきっかけは①新聞②知人友人から③パンフレットの順で、またJVCへ寄付を始めたきっかけは①パンフレット②知人友人の紹介③新聞の順でした。

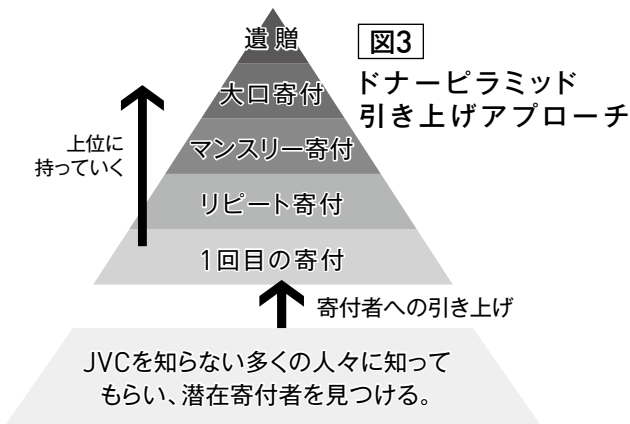
しかし2000年以降のデータに限ると新聞よりもインターネットが上位にきています。今後インターネットによる情報提供の強化の必要があります。JVC支援者の過半を占める60歳以上の方はまだインターネットよりも印刷媒体を望んでおられました。紙媒体での情報提供も充実させる必要があると認識しました。

図2のとおり、興味あるJVCからの報告は、①JVC活動に関連した世界や世の中の動き②各地のJVC活動紹介③活動地訪問レポートとなっており、JVC活動そのものをもっと支援者の方に深く伝える必要があることがわかりました。

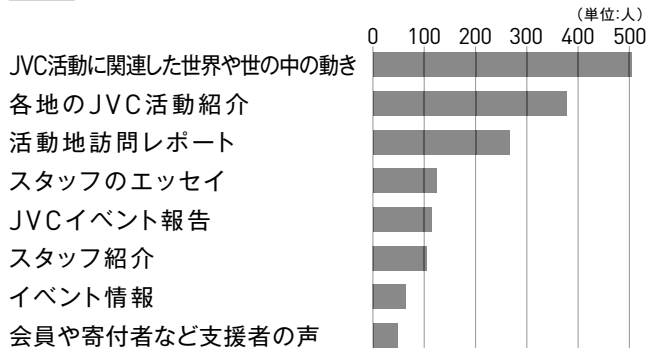
## JVCの活動を知ってもらうためにすべきこと

民間の非営利組織が活動資金を集める活動をファンディングと呼んでいます。図3はドナー・プログラミン





**図2** 興味のあるJVCからの報告



ドと呼ばれ、ファンドレイジングにおいて個人の寄付者（ドナー）を獲得して団体により大きな貢献をしていただくステップを概念化したものです。

このなかで、現在約2000人が登録しているマンスリー寄付者を3000人まで増やすことが重要と考えます。それは毎月毎月のご寄付をいただくことにより団体の財務状態が安定するからです。また最近「遺産を社会に役立てたい」という方が増えてきました。最終的には人生の集大成としての社会貢献である遺贈を多くの方がJVCに申し出てくださることを目指しています。

JVCに対する熱い支援者が多いにもかかわらず、残念ながら世のなかではJVCの知名度は低いのです。まずは世のなかの人々へJVCの活動や理念を知ってもらわねばなりません。そしてその後ステップアップして寄付者になっていただきたいのです。

寄付者を増やすために、また寄付

総額を増やすために次の施策を考えています。

【1】JVCの活動を直接伝える場を充実させる。

現地駐在員の活動報告会のような集まりを頻繁に開催し、JVCの活動を知っていただく。場所はJVC事務所だけでなく東京近郊、関東地方さらには地方でも行う。

【2】JVC支援者になっていただくような方を対象に、新聞、雑誌などのメディアを使い、JVCの存在、活動を知ってもらい（寄付者予備軍となってもらい）その後寄付者になっていただく。最初のターゲットは60代女性とする。

日本では、若年者よりも高齢者が寄付に高い関心をもつが、図4のように、アンケート返信者に限っても、60代だけで35%（女性だけでその7割の約24%）も占めている。その60代女性が日本の人口構成で一番多いことも、それなりの数の寄付者に出会える可能性を期待させる。

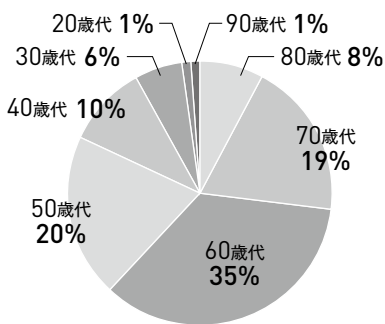
【3】現在のマンスリー寄付者に増額をお願いする。

毎月500円から寄付できることが魅力の一つとなっているが、余裕のある方には毎月の寄付額増をお願いしていく。

本誌読者の皆様も、JVC活動を支えるためにぜひマンスリー寄付を始めてください。またお友達、知人へJVCを紹介しマンスリー寄付をお願いしてください。

一人でも支援者を増やすことがJVCを支える基盤を強くすることになります。皆様のご協力をお願いいたします。

**図4** 年代構成





11月に平壤を訪問して、朝鮮赤十字会の全成竜副書記長(写真右)に支援を伝達する筆者。

## 朝鮮民主主義人民共和国水害緊急支援報告

### 被災地の人々に

### 日本からの「心」を寄せて

KOREAごどもキャンペーン事務局長 筒井 由紀子

JVCほか3団体で構成するKOREAごどもキャンペーンは、国交のない朝鮮民主主義人民共和国と日本を、人道支援として交流を通してつないできた。今回、北東部での洪水発生に際して、2007年以来9年ぶりに支援に取り組んだ。東アジアの情勢、そして支援を取り巻く環境も変化するなかで、日本からの「支援」は何を伝えられるか。

### 朝鮮北東部で 起きた大洪水

2016年8月末から9月上旬にかけて、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の北東部を台風が襲い、中朝国境を流れる豆満江<sup>トマンガン</sup>の流域で大洪水が発生しました。死者・行方不明者は500名、3万棟を越える家屋の全半壊で7万人が住まいを失い、上下水道など生活インフラの破壊で少なくとも14万人が緊急支援を必要とする状況となりました。

KOREAごどもキャンペーン(以下ごどもキャンペーン)も、現

地からの支援要請を受けました。9月中旬に北朝鮮を訪問したNGO関係者を通して、緊急支援活動の先頭に立っている朝鮮赤十字会からの状況報告を受けたほか、国連機関、国際赤十字連盟(IFRC)、国際NGOや朝鮮赤十字会が現地の行政機関と実施した合同調査に基づく緊急支援アピールなどを考慮し、10月に緊急支援に取り組むことを決定しました。

### 人道支援は 10万円まで？

16年に入って1月、9月と相次い

だ核実験やミサイル発射実験のため、日本政府は経済制裁の強化・厳格化を進め(注1)、人道支援には取り組んでいません。日本独自の制裁は09年以降、大変厳しくなり、「これ以上打つ手のない」状況です。今回の制裁強化では14年のストックホルム合意(注2)で一部緩和された条件が元に戻されたのに、加えて「北朝鮮」向けの支払いは「人道目的かつ10万円以下の場合」を例外に原則禁止という項目が付け加えられたため、文面通りに受け取ると人道支援も10万円の制限内ではしか実施できないこととなります。このハードルの高さから、多くの在日コリアンの団体や日本人の団体が支援を見送りしました。

ごどもキャンペーンでは「人道支援」は制限されるべきではないと考え、財務省へ問い合わせました。財務省の返答は、事前に「支援金の支払」の許可申請を行い、「人道支援を行った事実の確認方法」が報告されるならば、いくらであろうと可能とのことでした。ただし、支援の流れのスキーム図、現地実施機関の

受取書と支援が被災者に届けられた報告(証拠写真付き)などを提出する必要があります。その後、現地とのやり取りで、朝鮮赤十字会から受取書の発行や支援実施の報告は協力可能との返答を受け、申請に入ることができました。しかし、正式に許可書を受け取るまでに約1ヵ月を要し、募金呼びかけが現地訪問のわずか2週間前となり、目標額(100万円)を達成できないまま、支援を実施せざるを得ない状況での出発となりました。

### 緊急支援の 先頭に立った赤十字

11月22日に平壤<sup>ピョンヤン</sup>到着。折からの寒波の襲来で最高気温は0度。朝鮮中央テレビでは、ほぼ24時間体制で建設されたという、被災地域である会寧市<sup>ウネリョク</sup>の新しい住宅(アパート)11900世帯が完成し、入居する被災者の姿がニュースで放映されていました。

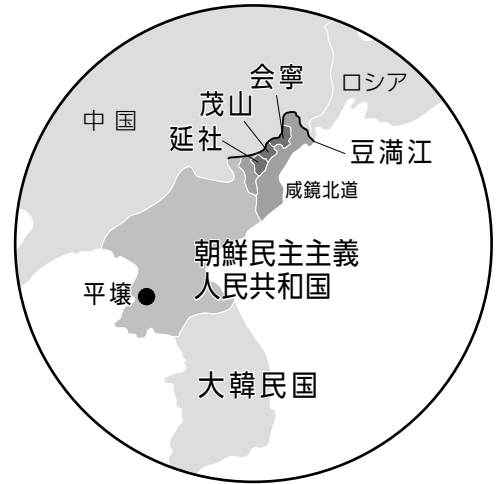
朝鮮赤十字会の全成竜副書記長<sup>チェンヨン</sup>はまず、「厳しい状況の中、日本から支援をするということがどれだけ大

◎注1…経緯は、安全保障貿易センターのホームページに詳しい。http://bit.ly/2jLgGxH  
◎注2…2014年5月の日朝合意。詳細は外務省ホームページを参照。http://bit.ly/1r5YbB4





咸鏡北道・茂山では、10,000世帯以上が全半壊した。  
(国際赤十字連盟ウェブサイトより)



変かよくわかっています。だからこそ、支援くださった日本の皆さんの気持ちや大事に、心からの感謝を伝えたい」と迎えてくれました。

平壤の朝鮮赤十字会本部に被災地域である咸鏡北道の支部から大雨の情報が入ったのが8月31日。翌1日には緊急支援助物資配布の要請が届き、全きょんも2日には支援助物資を携えて現地入り。しかし道路や橋などの損傷が激し

く、大きな被害を受けた茂山、延社などには当初たどりつけなかったといえます。最大1800人近くの赤十字奉仕員が、避難の呼びかけから、捜索、救助、負傷者の初期治療や搬送、支援助物資の配布まで行政機関にあたる咸鏡北道の人民委員会と協働して対応したそうです。咸鏡北道はこれまで自然災害が比較的少なかったため、避難警告に従わなかった人が多く犠牲になったそうです。

平壤在住の国連機関や国際機関、国際NGOも9月6〜9日に現地に入りました。一方、北朝鮮政府は、大きな国家行事である建国記念日(9月9日、5回目の核実験の実施日ともなった)の翌日、朝鮮労働党が被災地の緊急支援を指示、朝鮮人民軍が復旧活動に動員されて、土砂崩れなどで通過することのできなかった地域への支援が可能になったということです。

朝鮮赤十字会は、平壤駐在のIFRCと協働で救援活動に取り組んでいます。9月20日にIFRCが世界に向けて発表した1500万スイスフラン(約17億円)の緊急支援助ア

ピール(注3)に対して11月23日現在、3割弱しか集まっていません。冬の寒さが厳しい地域ということもあり北朝鮮政府が住宅復旧を最優先とするなか、赤十字もそれに協力して屋根の資材を支援。また今後に向けて、初期期に配布した衛生キットなどの赤十字倉庫の備蓄を補充するだけで精一杯だったといえます。上下水道を復旧させて衛生的な環境を整えることも重要な課題だが、資金不足がそれを阻んでいるといえます。

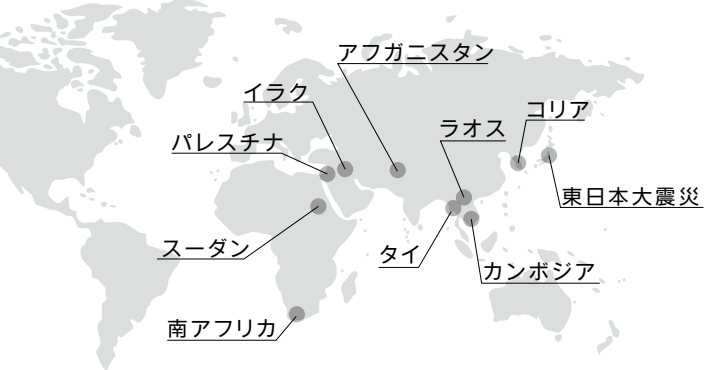
### 人道支援で 人の「心」を伝える

子どもキャンペーンでは当初、子ども施設への食糧支援に充当しようとして100万円を目標にアピールを行っていませんでした。しかし、現地赤十字の話から、食糧配給が優先的に被災地に振り分けられていることがわかりました。そして、それよりも脆弱層の衛生状況改善のために、被災地の子ども施設(託児所や幼稚園)に太陽熱温水器を設置したいとの要望があげられました。設置場所や設置施

設数などの詳細は、後日報告が送られてくる予定です。

子どもキャンペーンは、96年に万景峰号で新潟からお米61トンを運んで江原道の配給所などに直接支援したことに始まり、自然災害の被害者への緊急支援、子ども施設への食糧支援、農村の託児所への太陽光パネル設置などこれまで20回にのぼる人道支援を経験し、透明性を確保しようと努力してきました。これらの取り組みは物理的な支援である以上に、現地の人々に日本の市民からの心を伝える信頼関係構築の試みでもありました。

有史より数多の人々が往来を重ねてきた日本と朝鮮。いま、人、モノ、すべての往来を断ち切ってお互いの顔を見えにくくし、国家間の緊張ばかりが高まっていく状況に私たちは大きな危惧を感じています。その先に平和は望めません。この東アジアの未来のために、日本と朝鮮の人々の心をつなぐ「人道支援」が有効な役割を果たすことは間違いないと思います。



JVCは現在、10の国・地域で活動しています。

# プロジェクト一覧

9月後半～12月前半

## スーダン

紛争による避難民・難民への支援  
(南コルドファン州)

紛争が続く南コルドファン州の州都カドグリ周辺で戦闘を逃れた避難民支援を実施している。避難民の母親を持つ子どもの多くは出生登録を持っていないため、就学が難しく5歳以下の医療無償制度も適用されない。こうした子どもを対象に出生登録支援を実施している。父親と死別または離別した子どもたちの出生登録は、家庭裁判所に母親が出頭して手続きを行う必要があるため、必要書類の取得などをサポートし、計800名を目標に登録を進めている。

国境を超えて南スーダン側に逃れ、難民キャンプで暮らす人々への支援も実施している。難民自身が運営す

るキャンプ内の幼稚園への備品支援、ボランティア教員への研修に加え、新たな活動として、ストリートチルドレンと紛争により障がいを負った子ども(または親が障がいを負った子ども)への学用品や学費の支援を行った。

さらに、7月に起きた南スーダン首都ジュバでの戦闘により多くの避難民が発生したため、情勢が一定程度落ち着いた9月に職員を派遣して調査を行い、ジュバ郊外の教会関連施設に避難していた人々への食料支援を実施した。11月に再び現地入りし、ジュバ東部グンボ地区の保



多くの受診者で混み合うグンボ保健センター

健センターへの医薬品支援や、村を襲撃された中央エクアトリア州ロボノク郡の被災民への食料支援を実施した。これらの活動は、カリタス・ジュバと協働して行った(本誌10ページ参照)。(今井)

## コリア

絵画交流『南北コリアと日本のともだち展』  
／洪水被災地支援



メッセージを書こうと展示のなかから気に入った作品を選ぶ子どもたち  
(中国吉林省延吉市、10月)

◎中国ワークショップ：延吉市少年児童図書館において10月中旬、今年度各地で実施している凧づくりワークショップを実施した。同会場では絵画展示も行い、展示作品への子どもたちからのメッセージをもらい受けた。

◎国内巡回展：京都(11月)、広島(12月)への絵画貸し出し、大阪(12月)で展示会を実施。大阪では、大学生による訪朝報告や平和コンサートなども開催し、多くの来場があった。

◎大学生交流：夏に訪朝して平壤の学生と交流した日本人学生たちが、横浜、東京、大阪で報告会を開催した。

◎洪水被災地支援：他団体と構成するKOREA子どもキャンペーンとして、8月下旬からの大雨洪水の被害を受けた朝鮮半島北東部への支援呼びかけを行い、11月下旬に平壤を訪問した(本誌14ページ参照)。(寺西)

## イラク

イラクNGOのスタッフが来日



新潟市で行われたワークショップ&報告会にて、紹介されたアクティビティをイラクで応用するために議論する二人(写真向端)

12月15日より約1週間、現地パートナー団体であるINSANのアリー氏とラミア氏を招聘した。JVCの理事でもある新潟国際情報大学の佐々木寛先生から、イラク現地を実施している子どもたちを対象にした平和や共生について学ぶワークショップにて応用・実施ができるよう、新潟にて非暴力トレーニングのワークショップを2日間にかけて実施した。2日目には併せて講演会も実施した。特にプログラム実施者であるラミア氏から、いわゆる「イスラム国」と戦闘の影響によって心に傷を受けた子どもたちの様子についての報告がなされた。富山県砺波市でも報告会を開催し、混乱する現地の様子と緊急支援の必要性について報告した。そこでは、緊急救援だけでなく地元のコミュニティと避難してきた人たちとの『共生』を促す取り組みの必要性を訴えた。(池田)



## パレスチナ

栄養失調予防事業／  
若者のレジリエンス向  
上事業／アドボカシー



ガザ地区で家庭訪問を行った横浜西ロータリークラブの方々とボランティアさん

◎栄養失調予防事業（ガザ地区）：これまでに1,577人の児童に栄養状態検査を行い、530人の妊産婦へのカウンセリングを行った。また、659回の意識改善講習会（調理実習含む）を実施し、5,597人の女性がこれに参加した。12月には日本から5人の支援者がガザを訪問し、子どもたちやガザのパートナー NGO スタッフと交流した。

◎若者のレジリエンス・地域保健の向上事業（東エルサレム）：学校でトレーニングを受けた学校保健委員会のメンバーが、地域保健サポートチームと会議を行い、地域保健改善のための小規模プロジェクトを計画した。16校が11地域で活動することが決まり、それぞれの地域で災害などの初期対応を行う緊急対応ルーム立ち上げやゴミ箱の設置、学校への非常口設置などの準備が進んだ。一部の地域ではすでに実施されており、学校側と地元の団体がつながる機会となった。

◎アドボカシー：パレスチナ人の権利回復事業で協働する NGO と情報交換の機会をもち、スタディツアーを実施した。また、11月に開催されたロータリー財団100周年記念シンポジウムに現地代表の金子が国際人道支援の現場で活躍するシンポジストとして登壇し、パレスチナの現状と JVC の活動について述べた。日本では、地方での講演を含め6回の講演を実施、計1,120人が参加した。（金子）

## タイ

日・タイ経験交流／  
医療支援（タイ南部）



八街市の市民農園を見学した

◎11月7日、タイから農村開発 NGO の若手スタッフ12名が来日し、日本の有機農業の考え方と実践について11日間にわたって学んだ。栃木県にあるアジア学院を訪問し、農村での指導者の在り方について学習したほか、千葉県では、成田市、八街市、東金市を訪問し、生産者と消費者の関係づくりやレストランとの提携、市民農園の実践を見学した。山形県長井市では、地域全体で行う生ゴミたい肥化の活動を視察。白鷹町では農産加工と経営について学んだ。（下田）

◎引き続き、ミャンマー／ビルマ人からの移住労働者の子どもたち400名が通う学校で基礎的な検診を実施。移住労働者やその家族に対して病院への緊急搬送のサポートや、重篤な患者の医療費減額の交渉、村や学校で健康教育活動を実施した。（長谷部）

## 南アフリカ

HIV陽性者支援  
（リンポポ州）



村の菜園トレーナーの畑で野菜づくりの技術を学ぶDICに通う子どもたち

家庭菜園研修の一環として、9月24日に「食」について考えるワークショップを実施、2村から32名の子どもたちが参加した。菜園をすることと店から買うことの違いや普段食べているものがどこから来ているのかなどを学んだ。その後は2015年度までに育成してきた活動村在住の菜園トレーナーと JVC が子どもたちの畑を定期的に訪問、フォローアップしている。全員ではないが、実践状況が非常にいい子どもたちも見られるようになった。

10月15日は、活動村のスポーツデーを利用して DIC ボランティアと子どもたちが HIV 予防啓発を実施、感染経路や予防、検査方法などについて話をした。10月18～20日、12月3、9日は、他地域の DIC と交流し、ボランティアと子どもたちがお互いの活動から学び合った。11月は日常的なモニタリング活動と並行して、DIC の建物の修繕を行った。

（渡辺）

## ラオス

農業・農村開発／  
土地森林保全事業  
（サワナケート県）



村の寺で行った共有林設置式の様子

2013年度からの現行事業が11月に終了するため、活動のまとめと、村や行政への移管のための式典や会議、資料の引き渡しなどを行った。

農村開発活動では、「米銀行」で必要な村でフォローアップを行ったほか、最終評価のため対面アンケートで村人の理解度調査を行った。「稲作技術支援」では収量調査を実施し、普及のため技術をまとめたマニュアルの作成作業を進めた。「ラタン植栽」では、2村で育苗ハウスを設置したほか、理解度調査を行い、植栽技術普及のためのマニュアル作りを進めた。

土地森林保全の活動では、「参加型土地利用計画」により2村で土地利用区分が設定され、式典を開催した。「魚保護区」では、規則を記した看板を2村で設置して式典を行った。1村で「共有林」を設定し、式典を開催した。また、一部の村では現況に合わせてより適切になるよう規則の改訂作業を進めている。これら3つの活動と「法律研修」に関して、理解度調査を行った。

また、新規事業に向けてサワナケート県内の候補地で調査を行ったほか、事業承認に向けて、行政手続きに入るための話し合いを開始した。（平野）

### アフガニスタン

地域保健医療事業／  
教育支援(ナンガルハ  
ル県)／アドボカシー



学校での健康教育の取り組みが活発に。  
「手がきれいになったよ!」

学校での健康教育を主導していく主体として立ち上がった「学校保健協議会」による活動として、昨年の歯みがきキャンペーンに続き、今度は手洗いキャンペーンが実施された。不衛生からくる病気の知識や適切な手の洗い方などを学んだ上で実際にその場で手洗いを練習した。教員によるとこのキャンペーンのあと、生徒たちが積極的に手を洗う姿が見られるようになり、成果が見られている。今後も学校保健協議会による手洗いの奨励とモニタリングが期待される。

FHAG(家族健康アクショングループ)という女性を対象とした月に一度の定期的な健康教室を引き続き開催している。普段外出の機会がほとんどない村の女性たちが集い、お茶を飲みながら話せる場所として機能していることもあり、高い出席率を維持している。この期間には、栄養失調(およびその改善法)や肺炎(予防と対処)などのテーマに加え、FHAG活動の長期的な目標や、どのような形なら継続していけるかなど、将来に向けた話し合いも始まった。昨年度から新たに加わった読み書きのできるメンバーの役割が鍵となるため、JVC内でも議論を続けている。(加藤)

### 南相馬

仮設住宅でのサロン運営

今季も継続して仮設住宅4カ所における「常設型サロン活動」を地元NPO「つながっぺ南相馬」と協力して実施した。仮設住宅から災害公営住宅や、避難区域指定の解除された小高区の自宅に移転する人が増え、利用者は減少傾向にある。仮設住宅の全戸調査を実施した結果、サロン利用者のほとんどが移転することを確認したため、今年3月末をもって「常設型サロン活動」を終了の予定。

災害公営住宅の大町公営団地で住民が実施するサロン活動に対する支援を継続中。一日の利用者も20人から30人ほどになり、運営が軌道に乗り始めている。現在、他公営団地でも住民主導のサロンを設立するため、関係各所と協議を行っている。(白川)

### 気仙沼

ししおり  
鹿折地区での  
復興支援



鹿折地区災害公営住宅の入居者を対象とした交流会の様子。参加者は共通の趣味の話などで盛り上がった

10月21日と12月1日、鹿折地区災害公営住宅の入居者の顔合わせを目的とした交流会を開催し、合計約40名の参加を得た。参加者からは「住み心地がとてもいい。ようやく落ち着けた」との声があがる一方で、「入居してから2カ月近く経つが、いまだに隣に誰が住んでいるのか分からない。ご近所付き合いを大切にしていこう」との意見が出された。

11月3日、旧浦島小学校にて浦島地区振興会主催の「写真展」が行われ、JVCも運営をサポートした。会場にはこの1年間の振興会の活動を振り返る写真が飾られ、参加した住民は楽しそうに写真を眺めながら感想を語り合った。地域資源を活かした活性化事業に取り組むNPO法人の立ち上げについて、引き続き住民有志と検討を進めている。12月には、振興会の会議の場でNPO法人立ち上げの趣旨説明などを行い、地域住民の理解と協力を呼びかけた。

養殖業の魅力と震災の教訓を伝える体験型ツアーの調整を進め、実施を決定した。例年好評を博している本ツアーは今年度で4回目を迎え、現在参加者を募集している。(岩田)

### カンボジア

農村における生業改善支援／  
環境教育／資料・情報センター

現在、カンボジア事業の活動レビューを実施しており、これまでの調査結果を基に、東京事務所およびラオス事務所からスタッフが参加、レビューを通して現在の活動の課題や今後の活動の方向性についての議論を行った。

農業リソースセンターでは、緑肥で育てた稲の収穫を農家と共に行い、化学肥料を利用しなくても十分な収穫を得られることを農家に実感してもらうことができた。さらに、来季のコメ作りにむけて、研修も兼ねて農家と一緒に堆肥作りを行った。現在、各農家でも堆肥作りが進められている。

一方環境教育では、これまでに実施してきた自然観察の結果を基に、児童たちが学校マップ作りに取り組んだ。(山崎)

### 調査研究・政策提言

外務省・JICAとの政策協議／  
各種提言

◎NGO・外務省定期協議会2016年度第2回ODA政策協議会(12月1日): 谷山、渡辺が参加。同じく2016年度第2回連携推進委員会(12月13日)に池田が参加。

◎外務省・JICA・NGOプロサバンナ意見交換回(第18回:11月11日、第19回:12月7日)に渡辺、高橋が参加。

◎11月にモザンビークから現地の農民およびNGO関係者を招聘。日本国内で院内集会や学会などで現地の状況を報告する機会を得た。

◎南スーダンへの自衛隊派遣とその新たな任務とされる「駆け付け警護」に関して、主に谷山がメディア(NHK『日曜討論』、『視点・論点』など)に露出、また今井が多くのイベントに登壇してその問題点を指摘した。(渡辺)



## 政治化される人々、地域に関わる意義と可能性

南アフリカ事業担当 渡辺 直子

2009年以降、「官民連携・投資促進」の掛け声のもと、日本政府はモザンビーク北部5州（テテ州、カーボデルガド州、ザンベジア州、ナンプーラ州、ニアサ州）における「ナカラ経済回廊開発」に積極的に取り組み、日本の複数企業（三井物産、新日鉄住金など）が石炭開発や鉄道・港湾などインフラ整備に投資している。5州のうち3州はプロサバンナ事業の対象地だ。しかし現在、この地域は現地の人びとが「内戦」と呼ぶ状況にある。いったい何が起きているのか。

### 「普通の人びと」を巻き込んでいく内戦

1977年より16年にわたる武力紛争を経験したモザンビークでは、92年の包括和平合意以降、「戦後復興の優等生国」と言われ、平和・民主主義の定着が進んできた。しかし、与党フレ

リモ党（紛争時の政権）とレナモ党（元反政府ゲリラ勢力）で、和平合意後の最大野党）間の武力衝突が13年から再燃、15年に激化し、

同年12月から翌年4月までに同国最大の炭鉱が存在するテテ州から1万人を超え、難民が隣国マラウイに流出するにいたった。その理由としては、「政府側の武装勢力（軍・特殊部隊・警察など）の攻撃が原因だ」とする難民の声が多く報じ

られている（注1）。そこからは、「普通の人びと」がレナモと疑われることで弾圧され、行き場を失い、難民化している様子が見て取れる。

政府とレナモ間の武力衝突は、16年に入ってザンベジア州、ナンプーラ州にも飛び火した。政府側によるレナモ関係者の逮捕拘留や暗殺（未遂含む）などが相次ぐ一方（注2）、レナモの反撃は、同地域を通る鉄道の襲撃などの形で行われている。内陸部・テテ州の炭鉱からナンプーラ州のナカラ港湾をつなぐモザンビーク北部の鉄道・港湾インフラ整備は、ドナー国の官民連携

による援助と投資が一体となった開発事業の象徴であり、国の外貨収入源である。日本は最大の投資・支援国だ。こうした武力衝突が生じている地域に共通する特徴のひとつに、14年の総選挙および前後の地方レベルの選挙で野党が勝利／引き分けた地域であり、

歴史的に与党の基盤が脆弱な地域であることが指摘される。ゲブーザ前政権（05～14年）は海外投資導入を打ち出し、この地域で鉱物資源開発、大規模プラテーション植林やアグリビジネス、インフラ整備を進めた。その結果、住民（多くが小規模農民）の土地が収奪され、貧富の格差が拡大した。住民の抗議行動とそれに対する政府による弾圧・人権侵害が続いており、一連の選挙結果はこうした事態に対する人びとの不満が反映されている（注3）。今回の難民流出は、これらのことと無関係ではない。つまり、政府への反発（野党（レナモ）支持の土壤に対する掃討作戦の体をなしている。

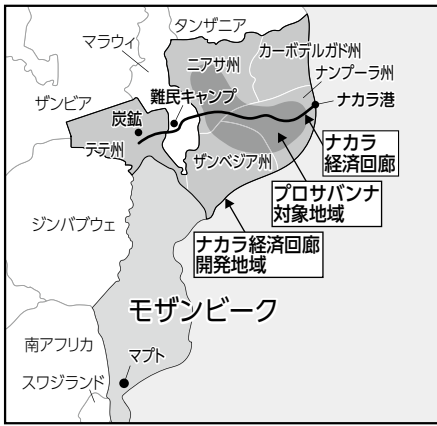
昨年の夏に筆者がナンプーラ州を訪問した際、小農たちが自国の現状を「すでに内戦状態にある」と口々に語っていた。政府が、人びとの犠牲の上に「開発」を行うことで政治基盤を失っているにも関わらず、抗議する人びとを「レナモ反政府」として弾圧する。その結果、人びとが政治的組織の間の衝突に巻き込まれていき、その延長線上にこの「内戦化」がある。この4年間、残念ながら、そのことを痛感してきた。そんな筆者宛に、昨年1月、面識のない現地の政府系新聞記者から突然こんなメールが届いた。「モザンビークでは、プロサバンナ事業（への反対活動）はクーデターを行うために使われているという説があります。別の政党が政権の座に着くために、フレリモ政権を引きずり降ろそう

という試みだと言われています。」

このメールは、「抗議の声をあげる者を国家転覆者として掃討する」道を、日本の援助がモザンビーク政府に開いた可能性を示唆している。しかしながら、日本政府は相変わらず現地の状況を「経済問題」の文脈のみで語り、「経済成長の効果」に乗じて、自国の国益や「投資・貿易のための援助」を謳い続けている。ナンプーラ州の女性農民リーダーは、そのような日本によるナカラ経済回廊開発・プロサバンナ事業を「悲しみの開発」と訴えている。

### JVCの地域開発事業がもつ意味とは

一連の出来事は、筆者にとって、自分の活動のあり方をも問い直す契機となった。平和研究の第一人者ヨハン・ガルドゥング博士は、戦争・紛争のない状態を「消極的平和」と捉え、貧困・抑圧・差別などの「構造的暴力のない状態」を「積極的平和」として提唱している。農民の声で再認識したのは、「難民を出さない社会づくりを」との思いで始まったJVCのアジア・アフリカでの活動やモザンビークの農民と取り組んできた活動は、「地域開発」や「政策提言」に留まらず、実は「紛争予防と平和構築」でもあったということだ。今、日本政府と私たち市民は、モザンビークのこれ以上の紛争拡大に担するか否かの岐路に立たされている。なんとかこれを喰い止めた。



◎注1…モ国メディア:<http://ngo-jvc.info/2iCDmyf>、UNHCRサイト:<http://ngo-jvc.info/2iCq2Kh> など。

◎注2…HRWサイト:<http://ngo-jvc.info/2ixbhOg>、2015年4月28日開催第11回ProSAVANA事業に関する意見交換会配布資料:<http://ngo-jvc.info/2jq0lq> など。◎注3…2014年10月29日開催報告会「日本のODAによるモザンビークの農業開発事業「プロサバンナ」に関する現地調査報告と提言」配布資料:<http://ngo-jvc.info/2isLwL7>

10/12(水)・11/20(日)・11/30(水)

## 現地駐在員による 活動報告レポート マンスリー支援者のつどい

会員・支援者担当 宮西 有紀



第1回報告会のあとの懇親会にて。参加者同士のコミュニケーションも生まれました

### 直接会える機会をつくろう

JVCでは、2,000名を超える方に「JVCマンスリー募金」によって毎月定額をご支援いただいております。マンスリー募金による寄付額は、年間2,700万円を超える大きな柱となっております。

しかしながら、会員の皆様とは年に一度開催される会員総会でお会いするチャンスがございますが、マンスリー支援者の方とは、顔を合わせる機会がありませんでした。実際に顔を合わせてお話すからこそ団体への共感も深まり、そして、JVCを、スタッフを、もっと身近に感じていただくことで信頼も強くなるのではないかと。このような思いもあり、「支援者とスタッフが直接対話する機会をつくる」「支援者同士の横のつながりをつくる」という今年度の計画を広報として立てておりました。

そうした中、本誌12～13ページでご紹介させていただいたアンケートで、支援者の皆様が参加経験もあり、今後も参加したい催し物として、「駐在員の活動報告会」を挙げられる方が多くいらっしゃいました。また、「興味のあるJVCからの報告」として、上位3つがJVC現地活動に関するものでした。アンケートとは別に、数名のマンスリー支援者の方へインタビューを実施させていただきましたが、どなたからも「実際に現地で活動をしている人の話を聞きたい」との声をいただきました。

広報の「直接対話する機会をつくる」、ファンドレイジングの「JVCの活動を直接伝える場を充実させる」、両方の面から、今年中に、「マンスリー支援者限定の活動報告会」をまずはトライアルで数回実施しよう、ということになりました。

### 現地の活動報告から財務構造の話まで

報告会を開催するにあたり、「告知」をどうするか。実は、アンケートでは、もうひとつ、特徴的な結果が表れていました。希望する報告手段として、実に65%の方が「郵便物」と回答されていました。インターネットで情報を入手する方も増えてはいるものの、まだ紙媒体での情報提供を求めている方がマンスリー支援者には多いことがはっきりしました。皆様が希望されている活動報告会、せっかくなので限りなく全員にご案内したい。そこで、告知は、「メールアドレスを登録されている全国のマンスリー支援者にはメールでご案内」「メールアドレスがない、報告会開催地近辺に住のマンスリー支援者には郵便でご案内」をしました。

第1回はスーダン事務所現地代表の今井による「南スーダン緊急支援報告」を東京で、第2回は代表谷山による「南スーダン緊急支援を含むJVC活動報告」を大阪で、そして、第3回はエルサレム事務所現地代表の金子による「パレスチナ活動報告」を東京で開催しました。いずれも無料ご招待とし、おひとりまで同伴可能とさせていただいたところ、3回で合計8名の方がご紹介で参加くださいました。

報告会は2部構成で行なわれ、1部は活動報告、そして、2部ではJVCの成り立ちからJVCの財政構造まで、マンスリー募金でご支援いただいている寄付が、どのように現地での活動と結び付いているのかをご説明させていただきました。特に、「活動制限のかからない寄付に支えられているからこそ、NGOの独立性が実現している」という話には、参加者の皆様が一樣にうなずいている姿が印象的でした。3回の報告会で、7名の方が募金の増額をお申出ください、さらに同伴で参加された方から1名が新規でマンスリー募金にご登録くださいました。

アンケートの結果から、マンスリー支援者のボリュームゾーンは「60代女性」ということが分かり、こうした方々が参加しやすい時間帯をかんがみて、報告会は大阪を除き「平日昼間」に開催されました。この「時間帯」も新しい試みです。

### 懇親会での声から想いを改めて受け止める

3回とも、報告会のあとに懇親会も行なわれ、東京開催時はJVC事務所でスタッフと支援者の交流が実現しました。大阪で開催された際は、人数も少なかったため、全員の顔が見えるよう机を配置し、そのまま同じ場所で懇親会を実施しました。

懇親会では、「JVCを知ったきっかけ」や「なぜJVCを選んでくださったのか」、「今後、どのようなイベントを希望するか」など、直接ご意見をお伺いすることができました。皆様それぞれの想いを聞くとともに、JVCの広報やファンドレイジングへもアドバイスもいただき、今後の計画実施にあたり、勇気と自信になりました。

当初は3回のトライアル予定でしたが、2月にもう1回開催する予定です。これらをしっかりレビューして、来年度以降の広報・ファンドレイジング活動に活かしていきたいと思っております。と同時に、「会員限定イベント」も計画しておりますので、会員の皆様とも、ぜひ、直接お会いして、意見交換ができればと思っております。



# イベントあらかると

10月～12月

イベント・ピックアップ!

11/27(日) 東京・千代田区

## 田沼武能「世界中の輝く瞳と出会って」 JVC国際協力カレンダー2017 発売記念トークイベント

2016年度パレスチナ事業インターン 大室 奈津美



写真:田沼さんご本人(中央手前)からサイン入りのカレンダーをいただきました!(右端が筆者)

去る11月27日日曜日の夜、JVC東京事務所から徒歩5分にあるアートスペース「3331 Arts Chiyoda」にて、2017年JVC国際協力カレンダーに写真をご提供いただきました写真家、田沼武能さんによるトークイベントが開催されました。

わたしと田沼さん(の写真)との出会いは今からさかのぼること10数年前、わたしがまだ小学生の時のことでした。当時の愛読書『トットちゃんとトットちゃんたち』で、当時ユニセフ親善大使だった黒柳徹子さんに同行し、世界中の「トット(=子ども)ちゃんたち」の写真を撮影されていたのが田沼さんだったので。その頃から、いえ、それ以上前から「子ども」の写真を撮り続けられてきた田沼さんから、どんな写真と言葉が飛び出てくるのか? それ

が楽しみでこのイベントに参加しました。

今回のカレンダーに載っている写真は、みな愛らしい、無邪気な子どもの姿をとらえたものばかりですが、田沼さんが撮る子どもの写真はそればかりではありません。トークイベントでは、迫撃砲を受けて顔の一部にえぐれたような怪我をした子、飢えで骨と皮だけのように痩せてしまった子、厳しい目つきで銃のおもちゃを構える子…など、様々な子どもの写真を見せてくれました。

そういった写真を見るのは、決して気持ちのいいものではありません。しかし、写真を撮られたときの状況を淡々とお話される田沼さんの言葉を聞いていると、目の前に映し出された写真がまぎれもなく現実であることを実感させられました。目をそらすよりも、かわいそうと思う

よりも、「世界には、こういった過酷な状況に置かれている子どもたちがいるのだ」という事実をしっかり受け止めなければ、と強く思いました。

また、イベント終盤に行われた質疑応答での田沼さんのお言葉も印象的でした。「田沼さんがこれほどまで長きに渡って、写真を撮り続けるモチベーションはどこから来るのでしょうか?」という質問に、ニッコリと一言「いやあ、写真っておもしろいんですよ!」数えきれない写真を撮り、沢山の賞を受賞されてなお、子どものような純粋でまっすぐな答えに、田沼さんの写真の素晴らしさの秘訣が、少しわかった気がしました。

そんな素晴らしい田沼さんの写真がいっぱいのJVC国際協力カレンダー2017「輝く瞳」、皆さまぜひお手にとってご覧ください!

### その他の主なイベント

10/1(土)、2(日) 東京都・お台場【出版】  
グローバルフェスタJAPAN2016

10/2(日) 山梨県韭崎市  
アフガニスタン人が語る  
“対テロ戦争”の真実と平和への思い

10/7(金) 東京都台東区  
南スーダン・首都ジュバ最新報告

10/8(土)、10/15(土) 東京都新宿区  
映画「ある戦争」2週連続トークイベント

10/12(水) 東京都中央区  
南スーダンの現状と自衛隊の駆けつけ警護

10/14(金) 愛知県名古屋  
南スーダンPKO問題を考える

10/15(土) 山梨県韭崎市  
穴山町サンマ祭り2016

11/3(木) 兵庫県尼崎市  
南スーダンからの報告  
～武力で平和はつくりえない～

11/5(土) 宮城県仙台市  
南スーダンの現状と自衛隊の国民監視

11/5(土) 東京都日野市  
南スーダンの現実と平和憲法を持つ  
日本の果たすべき役割

11/7(月) 東京都豊島区  
南スーダンPKO自衛隊派遣の危険性を問う

11/9(水) 東京都立川市  
南スーダン最新レポート  
What about South Sudan?

11/11(金) 東京都港区  
南スーダン内戦危機、現地の情勢と  
国際社会の関わり

11/12(土) 岩手県花巻市  
南スーダンの現状と武力行使で「失うもの」

11/19(土) 大阪府大阪市  
第30期関西NGO大学  
「いま、NGOを問う」

11/24(木) 東京都渋谷区  
元米兵×元自衛隊員×現NGOスタッフ  
聞きたかった戦争・紛争の「リアルな話」

11/26(土) 愛知県名古屋市  
生活の地を追われる難民 その現状と対応

11/27(日)、12/18(日) 東京都・JVC東京事務所  
「南北 코리아 と日本のともだち展」  
日朝学生交流報告会2016

11/28(月) 東京都・参議院議員会館  
日本が推進する経済開発モデルと人びとの暮らしへの影響

11/29(火) 東京都豊島区  
モザンビークから農民リーダー来日!  
～奪われる土地・権利～

11/30(水) 東京都・JVC東京事務所  
会計から見るNGO Vol.1  
～なかなか聞けないNGOの活動の裏側～

12/3(土) 大阪府大阪市、12/4(日) 東京都世田谷区  
JVC国際協力コンサート2016  
第23回大阪公演、第28回東京公演

12/9(金) 東京都港区  
誰も置き去りにしない!  
福祉農園の経験から考える全ての人が  
一緒に暮らす世界と農業

12/17(土)、18(日) 新潟県新潟市  
平和の創り方ワークショップ&イラクでの  
取り組み報告会



## JVCなひと

### 「おせっかい」 エネルギーで 人をつなぐ

JVC会員 筒井 百合子



JVCとの最初の出会いは、10年以上前、外務省主催の英国研修でJVCの岩間さん(当時)と一緒にした時でした。その時にお話を聞いて、日本にこんな本格的な国際協力NGOがあることを初めて知ったのです。その後、親戚の筒井由紀子さんが「南北コリアと日本のともだち展」の活動をされていることや、建築関係の仕事をしている夫が岩崎俊介さん(元JVC代表)のお家作りにかかわっていたことを知ったりと、ほんとに不思議な縁を感じています。

私は20年ほど前から、大阪府豊中市のNPO「国際交流の会とよなか(TIFA)」で事務局長兼ボランティアメンバーとして活動しています。地域密着型のボランティア団体ですが、「国籍や文化の違いにかかわらずだれもが生きやすい社会をめざす」という目的のもと、大阪の元気なおばちゃんたちを中心に、国際交流、在住外国人支援、国際理解教育、ネパールの女性と子ども支援など、国内外で多彩な活動を展開中です。その「おせっかい」エネルギーで、ついには自前のカフェ・レストランまでオープンしてしまいました。

た。

「カフェ・サバナ」(サバナはネパール語で「夢」)では、地域に住む様々な国籍の外国人が、日替り・国替りで母国の家庭料理を紹介しています。多国籍の集団ならではの難しさや飲食業の厳しさを痛感する日々ですが、石の上にも4年半。今では外国人ママたちがたくましく成長し、運営も担っています。

いろんな国の人たちと接して日々感じるのは、平和と相互理解の大切さです。母国の現状に心を痛めている人たちも皆、「日本のように戦争のない平和な国になりたい」と言います。私たちがこのようにいろんな国の人たちと一緒に活動できるのは、日本が今ところどここの国とも戦争していないから。武器をつくりたり戦争に関わる国になってはいけない、異なる文化を排除する社会になってはいけない、と思います。

「武力によらない国際協力」という方針のもとに活動するJVCは、私にとって心強い存在です。これからも、独立した骨のあるNGOであり続けてください。

## おすすめ本

### 『まんが パレスチナ問題』

山井教雄著 講談社  
2005年 740円(税抜)  
パレスチナ事業担当 山村 順子



「パレスチナ問題って複雑すぎてわからない」「登場する国や人が多すぎて挫折してしまった」「きちんと歴史をさかのぼって理解したい」……こうした悩みに応じてくれる本書は、「コミカルなイラストと文章でパレスチナ問題をとても分かりやすく解説してくれま

す。 心とする国際社会とその他のアラブ国家に振り回され、最も被害を被ってしまったパレスチナの一般市民たちの姿が浮き彫りになっています。

文中に登場するガイドたちが、本書の大きな魅力のひとつです。1人目は東エルサレムに住むパレスチナ人のアリ。もう1人はエルサレム在住、ユダヤ人のニッシム。そして肝となるのが、二人の間で客観的な立場にいる猫「エルサレムのねこ」。この二人と一匹が、歴史上の出来事を順を追って(始まりは紀元前19世紀!)、多くの部分で異なる意見をぶつけながら(時には同意しながら)説明してくれま

す(現実の世界ではユダヤ人とアラブ人が対話をする場を持つこと自体とても難しい)。それぞれのキャラクターの表情が豊かで、両者の複雑な感情をよく表しています。そこからは、イスラエルの占領から引き起こされる様々な構造的暴力、そしてパレスチナ人を代表する人々の腐敗や怠慢、そして欧米を中

「説明してくれま(現実の世界ではユダヤ人とアラブ人が対話をする場を持つこと自体とても難しい)。それぞれのキャラクターの表情が豊かで、両者の複雑な感情をよく表しています。そこからは、イスラエルの占領から引き起こされる様々な構造的暴力、そしてパレスチナ人を代表する人々の腐敗や怠慢、そして欧米を中

「テロ」(自爆攻撃)などの暴力的な手段はもろに批判した上で「イスラム教でもこのような行為は否定されています」、それでもなぜ世界中できちんと教育を受けたイスラム教徒の若者がそうした行動に走る現実がなくならないのかを、本書はアリのこのセリフを通して教えてくれています。

アラブ人にもユダヤ人にもインタビューを重ねながら書き進めたという本書は、そのエンディングにも「反民族主義」である作者の信念があらわれています。パレスチナ問題を理解するのに挫折しそうないたら、本書を手

取ることをお勧めします。



# お知らせ

## 募集コーナー

### 週末は気仙沼。海の仕事と人に出逢う旅2017

養殖体験や見学を通じて気仙沼・四ヶ浜地域の暮らしを満喫します。普段は経験できない、牡蠣・わかめの養殖体験や水産加工工場の見学などの企画が盛りだくさん！気仙沼の人々が皆様のお越しをお待ちしておりますので、ぜひご参加ください！

日 程：2017年2月18日(土)～19日(日)  
3月4日(土)～5日(日)  
※1泊2日、現地集合／現地解散(JR気仙沼駅)  
代 金：17,000円(税込)  
※現地交通費、宿泊費(夕／朝食付)、昼食代を含む

※詳細は、同封のチラシをご覧ください。

### JVC合唱団 4月5日(水)練習開始!

とどげ歌声東北へ世界へ。国際協力&東北復興支援のために『メサイア』を歌いませんか？12月の舞台に立つ、歌声ボランティアを募集中します。

演 目：ヘンデル作曲『メサイア』  
本 番：JVC国際協力コンサート2017  
第29回東京公演  
公 演 日：2017年12月9日(土)15時開演  
練習期間：2017年4月5日以降、  
毎週水曜日18時半～21時  
練習場所：日本ホーリネス教団 東京中央教会  
(新宿区北新宿1-24-12)ほか  
練習費：一般3,000円(月額)、学生2,000円(月額)

お申込み・お問い合わせ JVCコンサート事務局 石川  
TEL：03-3836-4108、MAIL：concert@ngo-jvc.net

### 2017年度東京事務所インターン

1年間、週2日スタッフの仕事を手伝いながら、NGOの視点や問題意識を学ぶインターン制度。毎年10名前後の学生、社会人等、様々な立場の方が参加しています。人とのつながり、JVCから多くの学びを得てください！2016年度インターンによる「インターン募集説明会」を開催します。

応募締切：2017年2月28日(火)  
◎説明会、応募方法についてはJVCホームページよりご確認ください。

### 会員限定イベント開催!

会報誌をご愛読いただいている会員の皆様に向け、今回の特集記事(東エルサレム)の解説会を開催いたします。半年間のエルサレム駐在を終えた並木から、パレスチナの最新情報お届け!

日 時：2017年2月24日(金)19時～21時  
場 所：JVC東京事務所(台東区上野5-3-4  
クリエイティブOne秋葉原ビル6階)  
登 壇 者：パレスチナ事業担当 並木麻衣  
◎ぜひ、会報誌『Trial & Error』をご持参ください。  
◎詳細はJVCホームページよりご確認ください。

お申込み・お問い合わせ 会員担当 宮西  
TEL：03-3834-2388 MAIL：miyanishi@ngo-jvc.net

## 募金集計

募金にご協力ありがとうございます。  
JVCの活動は、皆さまの募金によって支えられています。  
JVCへの募金は、税制優遇措置を受けることができます。

指 定 先	期 間 (9～11月)
無 指 定	10,334,233
タイ	29,500
カンボジア	279,110
ラオス	1,081,064
南アフリカ	139,452
アフガニスタン	427,810
イラク	27,500
スーダン	2,144,530
パレスチナ	2,608,005
南タイ	1,570
コリア	79,708
東日本大震災	1,884,660
国内震災	9,000
熊本地震	204,590
みどり一本	128,000
東京管理	11,500
調査研究	30,500
コンサート	459,300
その他	21,780
合 計	19,901,812

上表に「夏／冬の募金」も含まれます。  
スーダンには「南スーダン緊急支援」も含まれます。

## 人 事

### 入 職



仁茂田 芳枝 カレンダー事務局(1月1日付)

ボランティアチームとインターンを経て、この度入職いたしました。最近、ようやくカナヅチを脱出！色々な方のお話を聞くこととライブ通いが好きです。魅力あるカレンダーで貢献できるよう頑張ります。

### 異 動

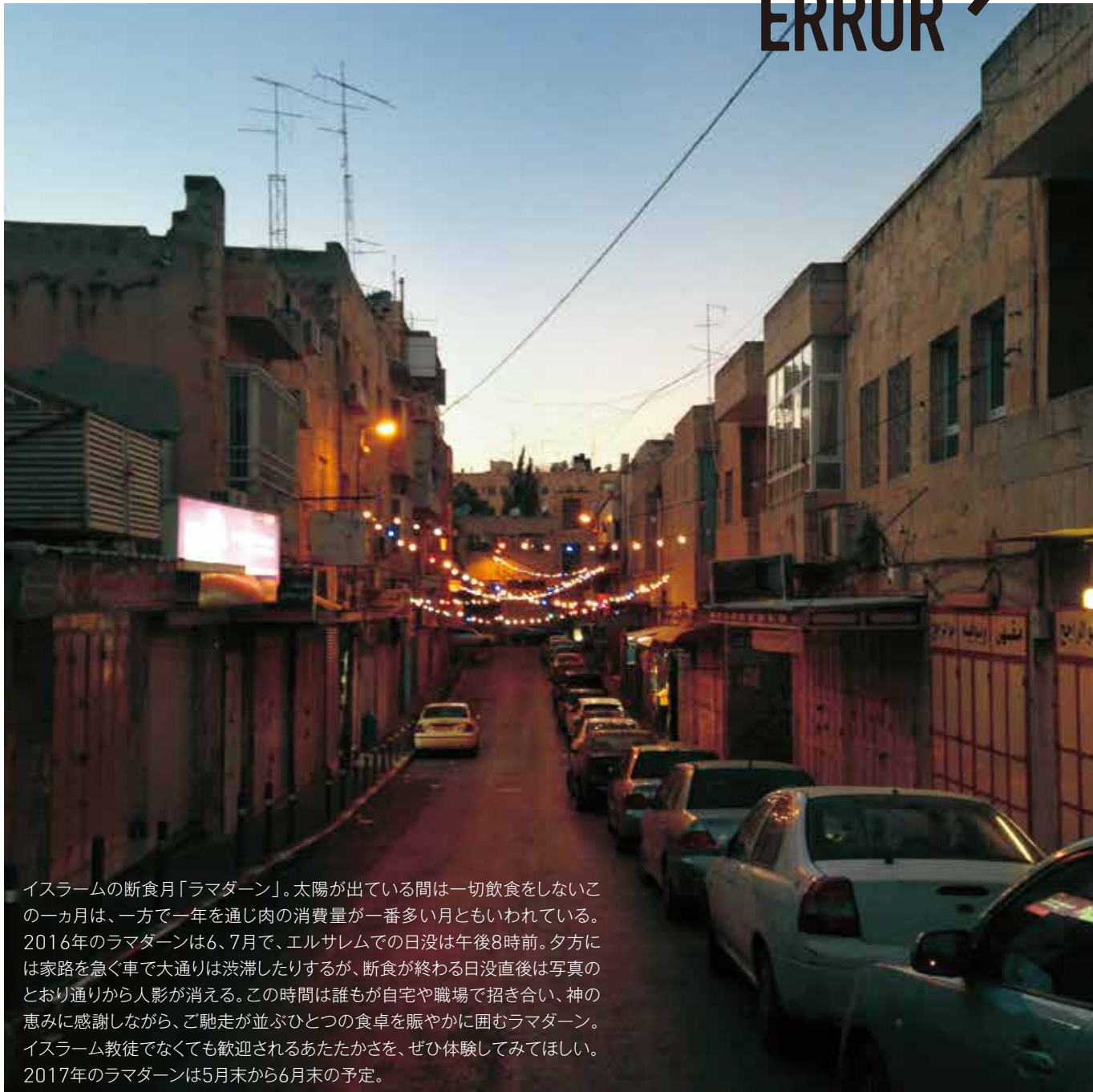
山崎 勝 非常勤カンボジア事業担当(11月1日付)  
並木 麻衣 パレスチナ事業担当  
(エルサレム事務所現地調整員より：1月1日付)

### 退 職

稲垣 美帆 カンボジア事務所現地調整員(10月31日付)

## 編 集 後 記

ネットニュースで見た「休息」と「安静」の違い。お医者さんによると、「休息」とは「好きなことをして息を休めるということ」で、ずっと寝ている場合は「安静」だそうです。これを読んで、はっとした人は多いはず。かくいう自分も例外にはあらず。仕事の糧になる趣味のタップダンス。仕事が理由でレッスンに行けず、風邪も長引くばかり。しかし、この度5ヵ月ぶりに復帰！これで元気満タン。また仕事も頑張ろう！(宮)



イスラームの断食月「ラマダーン」。太陽が出ている間は一切飲食をしないこの一カ月は、一方で一年を通じ肉の消費量が一番多い月ともいわれている。2016年のラマダーンは6、7月で、エルサレムでの日没は午後8時前。夕方には家路を急ぐ車で大通りは渋滞したりするが、断食が終わる日没直後は写真のとおり通りから人影が消える。この時間は誰もが自宅や職場で招き合い、神の恵みに感謝しながら、ご馳走が並ぶひとつの食卓を賑やかに囲むラマダーン。イスラーム教徒でなくても歓迎されるあたたかさを、ぜひ体験してほしい。2017年のラマダーンは5月末から6月末の予定。



特定非営利活動法人  
日本国際ボランティアセンター

日本国際ボランティアセンター(Japan International Volunteer Center)は、1980年2月、タイのバンコクで誕生した市民による国際協力団体です。JVCの活動目的は、国際社会のなかで、社会的、精神的、物理的に困難な立場を強いられるアジアやアフリカ・中東の人びとに協力すると同時に、地球環境を守る新しい生き方と人間関係をつくり出そうということにあります。そのため私たちは、自らの意志でJVCに参加し、活動を継続してきました。JVCはボランティアという言葉で、「自発的意志をもって、責任ある行動をとる」という意味で団体名として使っています。

#### JVCでは会員を募集しています

会員数(1月1日現在) 合計1,051名(正会員572名 賛助会員479名)

会員は総会に出席し、JVCの方針などを決定するほか、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・学習会等へ参加することができます。会員の方には年4回この会報誌と年次報告書をお届けします。入会のお申し込みや、会員の方の住所変更などは会員担当の宮西まで。

メールアドレス [miyanishi@ngo-jvc.net](mailto:miyanishi@ngo-jvc.net)

- 一般会員 10,000円
- 学生会員 5,000円
- 団体会員 30,000円

それぞれに  
正会員と賛助会員があります

#### JVCのオリエンテーション(説明会)にお越しください

JVCの活動内容をご紹介します。  
お気軽にご参加ください。[事前にご予約ください]

会場 JVC東京事務所 参加費 無料

第1月曜日 午後7:00~8:30  
第2・第4土曜日 午後2:00~3:30

ウェブサイト <http://www.ngo-jvc.net/>

メールアドレス [info@ngo-jvc.net](mailto:info@ngo-jvc.net)

Facebook [NGOJVC](https://www.facebook.com/NGOJVC)

twitter [@ngo\\_jvc](https://twitter.com/ngo_jvc)

